

第 37 回 日本病院薬剤師会近畿学術大会抄録

演題分類：14 がん領域

演題名：アファチニブの使用状況調査

演者：○逸見 結衣、多々見俊輔、遠藤由里香、渡邊小百合、岸本早百合、伊勢原祐子
菰渕 利香、藤原 正幸、小田中みのり、安達 嘉織、佐倉小百合、中晴 徹
大前 隆広、川高 菜緒、大谷 祐子、見上 千昭、柴田 博子、松本 敏明

【目的】アファチニブ（ジオトリフ®）は、2014年5月に薬価収載されたEGFR遺伝子変異陽性の手術不能又は再発非小細胞肺癌の治療薬であり、当センターでも2014年6月から採用されている。本剤は、高頻度の下痢や皮疹等が発現するため副作用管理が重要である。そこで、副作用発現状況を把握し、薬剤管理指導時に適切な情報提供を行うため、当センターでの使用状況を調査したので報告する。

【方法】2014年6月～2015年7月に当センターでアファチニブを処方された患者11名（男性7名、女性4名、平均年齢62.8歳）を対象とし、本剤の有害事象発現状況と対応について後方視的カルテ調査した。有害事象のGrade（以下G）はCTCAEv4.0に基づいて評価した。

【結果】11例の経過は、投与継続7例（減量継続2例含む）、有害事象にて中止3例、PDによる中止1例であった。有害事象と発現時期、対応について、下痢は11例（G3を2例含む）で平均day5.5（day4-11）、休薬2例・減量1例・中止1例、皮膚症状（皮疹・皮膚乾燥・爪囲炎）は10例で平均day10.7（day5-20）、休薬3例・減量2例、口内炎は9例（G3を1例含む）で平均day9.4（day4-14）、休薬2例・減量3例・中止1例であった（重複含む）。その他G3以上の有害事象は、低K血症（休薬）が1例、消化管出血（中止）が1例であった。有害事象に対しセット化された対処薬はないが、アファチニブ開始時に止瀉薬の処方や症状発現時に保湿剤、ステロイド外用剤、ミノサイクリン内服、アズレン含嗽薬・口腔用軟膏等が処方されていた。

【考察】下痢・皮膚症状・口内炎は高頻度かつ投与後早期から発現することが多い。対処薬の適切な使用や症状発現早期での減量・休薬は治療の継続に繋がることが示唆された。今回の調査結果を踏まえ、患者に副作用と適正な対処法の指導を行い、また対処薬のセット化等の支援を行うことで、副作用を最小限に抑え、患者の安全・安心な治療に貢献していきたい。